

発行所(郵便番号100)
東京都千代田区丸の内2-4-1
丸ノ内ビルディング781号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel (212) 4007・1447
編集責任者 中嶋 博
印刷所 関東図書株式会社
定価200円(年間購読料参千円)
1987年10月25日発行
第19巻 第10号
(毎月1回25日発行)
昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol. 19 No. 10

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi-Bldg., No.781. Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan.



社団法人スウェーデン社会研究所 設立二十周年記念祝賀会開催 The 20th Anniversary Festival of JISSS

べられ、併せてご出席の各位の長年に亘るご指導ご援助への謝意を表明し、今後更に一層のご理解とご愛顧をお願いした。

引きつゞき来賓の祝詞として、まず、スウェーデン大使閣下より、当研究所の活動が、両国の理解と親善の向上に貢献するところ誠に大であり、高く評価すべきである旨を述べられ、つゞいてイペロート前瑞日基金会長ならびにクリスティーナ博士より、今後の活動に大きな期待をもっている旨が述べられた。

これらの祝詞につゞいて、当研究所の中嶋博常務理事より、ヘックシャー元駐日大使、スウェーデン王立科学アカデミー会員のフセーン博士ならびにハンブレウス瑞日基金会長より寄せられた祝電が披露され、つゞいて、別記のとおり平田前所長ならびに小野寺顧問に感謝状と記念品の贈呈があり、高橋通敏元駐瑞大使の発声で乾杯が行われて懇談会に入ったが、思い出と激励の言葉と感謝の辞の交換に時の過ぎるのを忘れたなごやかな一夕であった。

本年、当社団法人スウェーデン社会研究所が設立20周年に当ることを記念し、去る10月5日に、東京、千代田区の霞が関ビルの東海大学校友会館望星の間において、その祝賀会を開催した。

この祝賀会には、駐日スウェーデン大使閣下ご夫妻ほか大使館関係の各位、イペロート前瑞日基金会長、ガデリウス・タロー氏、クリスティーナ・ノルディン博士ほかスウェーデン側約20名のご出席、日本側からは、歴代駐瑞大使、通産省等官庁関係の方々のほか、当研究所の法人会員である財界関係、ならびに学界、社会事業、医療、報道関係の有力者である当研究所の役員、会員等約100名の出席を得て、極めて盛大な会合であった。

祝賀会では、まず、松前重義会長および西村光夫理事長の挨拶が行われ、研究所設立以来の活動状況の報告、当初の目標達成には未だ不十分とする反省、設立目的がわが国の今後の発展に今やいよいよ重要性を増してゆくことへの認識と、これに対応して事業の充実を期している強い決意が述

目次

設立20周年記念祝賀会開催	1
スウェーデン大使の祝辞	2
感謝状と記念品の贈呈	2
スウェーデンよりの祝電	3
独学教師と熱心な生徒たち	松岡幹雄 3
ペッレとウプサラ	菱木晃子 4
SIP ニュース	5

MESSAGE TO JISSS



H. E. Ambassador Ove Heyman

This year the Japanese Institute for Social Studies on Sweden celebrates its 20th anniversary. After a period of extremely rapid economic growth in Japan it was felt by some that increased attention must also be given to the social consequences of this development and that in this respect Swedish solutions to similar problems might be of interest. The work of the Institute is carried out mainly through the publication of reports on specific issues of topical interest and through seminars at which various experts can impart their knowledge. Lately, the Institute has spread its field of activities also to the other Scandinavian countries.

It is obvious that activities such as are carried out by the Institute depend entirely on the devoted and selfless efforts by individual persons. I should like to pay particular tribute to the Chairman, Professor Matsumae, the President, Professor Nishimura, as well as to all Members, past and present, of the Board of Directors of the Institute.

As Swedish Ambassador I should like to confirm the important role that the Institute is playing in the relations between Japan and Sweden. For this reason it is my pleasure to look forward to many years of fruitful future collaboration between the Embassy and the Institute.

平田前所長並びに小野寺顧問に 感謝状および記念品を贈呈

平田富太郎理事には、昭和53年より昭和58年に亘り、当社団法人スウェーデン社会研究所の所長としてその活動を統裁され、また、小野寺百合子顧問には、当研究所の設立以来評議員、理事、顧問を歴任され、研究活動の充実、向上に献身的な努力を払われました。

このたび、当研究所が設立20周年を迎えるに当り、去る10月5日に開催された祝賀会の席上、松前会長より感謝状と記念品を贈呈し、感謝の意を表しました。



スウェーデンよりの祝電

My warmest congratulation on your 20th anniversary,

H. E. Former Ambassador Professor Doctor Gunnar Heckscher.

Heartfelt congratulations to the Japanese Institute for Social Studies on Sweden on its 20th anniversary. Best wishes for continued successful work in strengthening the connections between our two countries.

Professor Emeritus, Doctor Torsten Husén,

Member of the Royal Swedish Academy of Sciences.

For twenty years, the Japanese Institute for Social Studies on Sweden has been a center of knowledge about Sweden in Japan.

Your efforts to deepen the understanding between our two countries cannot be appreciated highly enough. We would like to extend our hearty congratulations on your twentieth anniversary, and we wish you all success for the future.

Professor Gunnar Hambraeus, Chairman of the

Sweden-Japan Foundation for Research and Development.

独学教師と熱心な生徒たち

スウェーデン語講習会講師

松岡幹雄

この秋で通算65回目を迎える当スウェーデン社会研究所主催のスウェーデン語講習会は、わが国でスウェーデン語を教える数少ない講習会として、毎回数十名の生徒を集めている。生徒はほとんどが職業をもつ若い人たちで、いずれ何らかの目的でスウェーデンの土を踏むことになっている、あるいは踏みたいと思っている人たちである。スウェーデンの社会や文化を研究している人たちがスウェーデン語の資料を読みたくてという方々も少なからずおられる。

私はここ10年余り講師を勤めさせて頂いているが、私自身スウェーデン語は独学である。もともと語学に興味があったが、サラリーマンの全くの趣味として余暇にスウェーデン語の勉強を始めたのである。もう20年以上前のことになる。講習会などなかったから、まず大学書林の「スウェーデン語四週間」、つぎにロンドン大学から出ているTEACH YOURSELF BOOKSのSWEDISHを読んだ。そして最後に清水の舞台から飛びおる思いでリングフォンのレコードを買った。当時丸善にも現物はなく船便で三月ほどかかったように思う。その間スウェーデン大使館のご紹介でスウェーデンの年金生活者と文通を始め、新聞の切り

抜きを送ってもらったりして、応用編の勉強が始まった。以後今日まで応用編の連続である。

このようにスウェーデン語教育法はおろか、スウェーデン語そのものも正式に教わったことがないから、スウェーデン社会研究所から講師の委嘱を受けたときは皆目自信がなかった。教壇に立って最初の2、3年間は全くの手さぐりで授業をした。当時の生徒諸氏に対しては今もって内心忸怩たるものがあるのである。

全く目的もなく闇雲に一つの言語を勉強できたことは今になってみればしあわせなことだったと思うが、ある目的をもって曲がりなりにも講習会と名のつく所で講義を受けられる、いまの人たちは恵まれていると思う。

数百人におよぶ生徒さんたちの思い出は尽きないが、紙幅も限られているので、その中のお二人の思い出を綴ってみたい。

大学教授と紹介されたTさんは礼儀正しい生徒さんだった。礼儀正しいだけでなく、予習復習もきちんとして来られ、文章の解釈や文法の練習問題もほとんど間違いなく答えられた。講習会の歴史に残る模範生のお一人だったのである。

そのTさんがある夕（講習会は午後6時半に始

まる)の授業に、10分か15分遅刻して来られた。生徒のほとんどが仕事を終えてから駆けつけて来る講習会に2、3人の遅刻者は珍しくない。講師も彼らにほとんど頓着なく授業を進めていく。その日の授業も緊張感がある中にもなごやかに時間一杯行なわれた。最後に出欠をとり、生徒たちは挨拶して三三五五帰っていく。ほっと一息つき、講師が多少の心の充実感を覚える一瞬である。そのとき、ざわつく生徒たちの中からTさんが数歩進み出て、温和な微笑をたたえたお顔で、「先生、きょうは遅れました、どうも申し訳ありませんでした」と一礼された。「いいんですよ」と言いながら、私は胸の中に熱いものがこみあげていた。

T教授が大学の研究所所長を兼ねる、ある学問分野の権威でいられることを知ったのは、ご卒業のずっと後のことである。

年齢はT教授の半分以下のOさんはスウェーデンへ織物を習いにいくというお嬢さんだった。健康で屈託のない性格の人気者だったが、語学は大の苦手のような感じだった。まじめに予習して来るのだが、授業になかなかついていけなかった。10週間のコースを二つ受けて合計20週間で教科書一冊を

上げ、修了というのが普通のパターンだが、彼女は10週間のコースを二度ずつ、都合40週間の授業を受けた。しかも皆勤だったように思う。最後の授業を終え、スウェーデン行きを間近にひかえたOさんは小さな包みを私に差し出して、「私は先生に二倍お世話になりましたから」と微笑んだ。もちろん私は彼女の思いがけないプレゼントをありがたく頂戴した。

Oさんはスウェーデンの片田舎でスウェーデン語で織物の勉強を続け、折りにふれ楽しい便りを送ってくれた。その後ストックホルムに移り、あらためてスウェーデン語のコースに通っていたが、ちょうど渡瑞1年目ぐらいの便りに「最近「r」がなんとなく出来るようになりました。(略)日本人だって「r」が出来る!といわれると、やっぱりがんばって練習するしかないですよええ…」と書いてきてくれた。29あるアルファベットの一つにすぎないが、日本人で「r」の発音が正確にできることはたいへんな進歩なのである。Oさんはがんばり屋である。

T教授やOさんとかかわらぬ熱心な生徒たちに恵まれて、独学教師も精一杯勉強を続けている。

ペッレとウプサラ

Pelle och Uppsala

会員 菱木 晃子

Ms. Akirako Hishiki

1986年は、ウプサラにとって記念すべき年だった。ウプサラが、Uppsalaの名で呼ばれるようになってから700年、(それ以前は、Väster Aros、現在のVästeråsに対して、Öster Arosと呼ばれていた。)町では、記念のTシャツから、ビール、コーヒーに至るまで、様々な商品が売られていたが、この700年記念に一役買ったのが、Pelle Svanslös -『しっぽのない猫ペッレ』であった。昨年から今年にかけてウプサラを訪れた方なら、ウプサラの観光案内所の表に、大きな猫のポスターがはってあったのを覚えておられる方も多いと思う。

『しっぽのない猫ペッレ』は、ウプサラを舞台とした猫の物語で、スウェーデン人なら、知らない人はまずいないだろう。30年代、作者のヨスタ・クヌートソン自身がラジオで物語ったのがきっかけで、1939年に『しっぽのない猫ペッレの冒険』(Pelle Svanslös på Äventur)が、さらに1951年までの間に計10冊のペッレシリーズが次々と単行本として出版され、ペッレの人気は、スウェーデン中に定着した。ペッレに登場する猫たちは、クヌートソンの知る実際の人物をモデルにしたもので、通りの名前もÅsgränd Övreslottsgatanなど、私たちにもなじみの深いものばかりである。初版からすでに半世紀近くたった今日でも、ペッレの人気は相変わらずで、ウプサラ700年記念にあたって、ペッレは、町のシンボルとして大活躍した。

さて、今年の夏もまた、ウプサラでは、『ペッレ週間』という企画が行なわれ、ペッレのキャラクター商品の販売や、本の割引、映画etc...中でも一番の目玉は、大教会の前から出発する『ペッレの足跡をたどる散歩ツアー』であった。ガイド

さんについて、1時間程で、お城の近くを一周するが、途中でペッレとマーヤのぬいぐるみが森から現れ、ツアーに参加している子供たちは、みな大喜びであった。

町の映画館で映画も見たが、こちらはあまりにアニメ化されすぎていて、いまひとつ……やはり原作のほのぼのとした Rundbelvi のさし絵の方がずっとよかった。

今年の収穫は、ウプサラのラジオで、毎朝、クヌートソンが語るペッレの話が聞けたこと（もちろん昔の録音だが）、それと、長い間探していた『Pelle i Skolan』（ペッレシリーズ第7作め）がストックホルムの古本屋でみつかったことである。私にとって、大満足の夏であった。

1987年8月 ウプサラにて

< SIP ニュース >

ストックホルムの国際シンポで討議された子供の事故

此の程、スウェーデンの保険会社フォルクサム（Folksam）とロンドンの児童事故信託（the Child Accident Trust）、コペンハーゲンの世界保険機構支部局、スウェーデンの各種政府機構の協力で、ストックホルムにおいて子供の事故に関するシンポジウムが4日にわたって開催され、18ヵ国から講演者が参加した。同シンポは「健康な社会 — 健康促進活動の一環としての子供の安全」というタイトルで、次の4つの表題の下、幅広い範囲の話題を取りあげた；「子供の事故と発展」、「地域の事故防止プログラム」、「環境対策」、「教育対策」

児童事故防止信託のヒュー・ジャクソン博士（Dr. Hugh Jackson）が、子供の事故に関するヨーロッパの状況の概略を述べたが、それによると、全世代の事故死に比して子供時代の事故死の比率が極めて高いのはスイス（8.5%）とフィンランド（8.0%）で、逆に、その比率が低いのが英国（2.3%）とオランダ（3.4%）だという。また、子供の事故全般についていえば、スウェーデン、デンマーク、西独の数値が比較的良好で、逆に最悪なのがユーゴスラビア、スペイン、ポーランド、ポルトガルであるが、これらの数値は国内向けで、国外との比較向ではない。ジャクソン博士は、また、明らかに子供の偶発的な怪我の最も一般的な原因である交通事故とやけどの極めて綿密な分析を行なった。

フォルクサムは、1982年以来の子供の車でのシートベルト使用を研究し、それらが事故の危険を50-90%減じることを報告した。因みに、子供座席が後ろ向きだと、事故の危険を少なくとも80%減じる効果があるという。シートベルトの使用にもかかわらず生ずる怪我は、主として、頭と首の怪我で車内部のサイド構造物への接触によるものである。交通事故による怪我のうち、子供に障害を与えるようなものは、主として、頭蓋骨/脳、首、脚部に生じている。

フォルクサムの子供の事故の研究は、交通事故が死亡原因のトップに位置しており、今日、多くの国で車の内部は事故が起きた際、子供を死亡させるかもしくは重傷を負わせる単一の最も一般的な環境であることを示唆している。結論として、同社は、極めて効果が高いことを理由に、子供のシートベルト着用の増加が肝要で、この種の装置は車の安全システムに不可欠なパーツだと述べた。

スウェーデンにおける子供の事故防止の概念

子供の事故防止用の製品のスペシャリストであるアクタ（Akta）によると、20世紀に入ってから、先進国においては伝染病を含む疾病による子供の死亡数は著しい減少を示したが、事故による死亡者数はほとんど変化が見られないという。同社は、防止と父母への情報によって、統計を改善できると確信をもって述べている。

アクタはスウェーデン語で「注意！」の意で、子供の安全のための店として1974年に設立された。今日では、同社は研究チーム、ジャーナリスト、公衆衛生コーディネーターを雇い、同社の特許製品その

他の高い規格テストをクリアした製品の製造、卸し、小売り、流通、販売を行なっている。同社の製品には、カーシート、ヘルメット、救命胴衣、門、窓の掛け金、料理道具の安全装置等がある。

アクタは民間企業であるにもかかわらず、安全装置の振興者として、公衆衛生の分野で重要な機能を果たしており、スタッフは医療機関並びに消費者機関——とりわけ赤十字や小児科病院——と緊密に連携して作業を行っている。アクタの主な関心事は、死亡や一生残るような障害をひき起す事故を防止することである。ただし、切り傷や打ち身といった小さな怪我は、危険をさけるための子供の学習過程に不可欠の部分だという。

幾つかの工業諸国の統計は、子供にとって重大な事故は年齢によって異なることを示唆している。すなわち、小さな子供にとって極めて危険な事故は、家庭内での火傷、誤飲、落下といったところだが、同時に、彼等は、交通事故——とりわけ乗員としての——犠牲者でもある。学童となると、戸外での事故——とりわけ、自転車や車の事故——にあうケースが増えるし、ティーンエージャーはスポーツや交通事故による怪我が特徴的である。また、特有の地域においては、あらゆる年齢層の溺死が多い。アクタは、その他の点では似通った工業諸国の子供の死亡に関する統計上の差異に着目、解明を試みた結果、それが少なくとも部分的には公共教育及び事故防止プログラムの多様性に起因している、という結論に達した。

現在、アクタは、スウェーデン国内の12の大都市、ノルウェー、フィンランド、西独に店舗を構えている。同社は、工業化世界全体に、その子供の安全に関する概念を広めることを目的としており、同社のフォーマットが、国によって少々改変すれば、国際的に通用するものであることを確信している。

昨年度、スウェーデンへの入国を許可された難民数 1万6,000人

スウェーデン移民局の報告によると、1986年度にスウェーデンに保護を求めて認可された難民1万4,600人に加え、1986/87財政年度には、ジュネーブの国連難民高等弁務官事務所とスウェーデンとの緊密な協力によって運営されている割り当て制に則って、新たに1,453人がスウェーデンへの入国を許可された。

移民局の役人は、同年にパキスタン、トルコ、東南アジアに4度足を運び、割り当て人数に則って約500人の難民のスウェーデンへの避難を認める決定を下した。実際に避難に関する肯定的決定が下された難民は1,600人を越えたが、これは政府によって設定された同年の難民の受け入れ枠1,250人を上回るものである。

1986/87年度、難民受け入れの割り当て枠に沿ってスウェーデンへの移民が決定した人々のうち、最も多かったのはイラン人以下、チリ人、エルサルバドル人、ベトナム人の順であった。大陸別では、アジア出身者(789人)、南米出身者(468人)、ヨーロッパ出身者(161人)、アフリカ出身者(35人)の順に多かった。割り当て制に沿って移民(入国)を認可するに際し、スウェーデンはスウェーデンに縁故のある人、大家族、障害者、他の国に保護を求めるのが困難な人々に対し、優先権を与えた。

1986年度のスウェーデンの市立図書館の貸し出し量、7,100万冊

公式報告によると、1986年にスウェーデンの市立図書館から貸し出された本は、前年度比で3%減の7,100万冊であった。また、その他のメディア——主として、視覚障害者向けの録音本やレコード——の貸し出し量は2%増280万冊であった。あらゆる種類の貸し出しを含めると、昨年、スウェーデンでは住民1人頭、年額8.8冊の本を市立図書館から借り出したことになる。

1986年度に、市立図書館は新たに240万冊の本を購入したが、これは前年度より2%程少ない。なお、新たに購入された本のうちの38%は子供向けの本であった。また、個々の図書館の操業コストを総計すると前年度比で5%増(固定価格で)の18億クローナ(432億円)となるが、これは住民1人につき216クローナ(5,184円)に相当する。